<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Title</td>
<td>ウィリアム・ブラックストン とその生涯と『イギリス法釈義』</td>
</tr>
<tr>
<td>Author(s)</td>
<td>堀部・政男</td>
</tr>
<tr>
<td>Citation</td>
<td>一橋論叢 61(4) 505-520</td>
</tr>
<tr>
<td>Issue Date</td>
<td>1969-04-01</td>
</tr>
<tr>
<td>Type</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
<tr>
<td>Text Version</td>
<td>publisher</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15057/2514">http://doi.org/10.15057/2514</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>

*rates_ingn disclosed*
ウィリアム・ブラックストン

- ウィリアム・ブラックストンの生涯

ブラックストン（Blackstone）の名は、わが国で法律学を学びはじめた者のあいだでは、ほとんど知られていないかもしれません。しかし、かれの存在の重要性は、イギリス法にしろアメリカ法を本格的に学べば学ぶほど、明らかになるであろう。本稿では、ブラックストンに関する研究の序説とするために、とりあげず、イギリス近代法史におけるブラックストンの位置については、かれの生涯と代表的な著作であるイド（The Institutes of the Laws of England）の体系を中心に検討を試みることにする。

一七三三年七月一日、父の死後に、ロンドンのチャーチ・ハウス・スクール（Charterhouse School）で生まれた。かれの母もまた、かれが二歳になるまえに、この世を去ったので、かれは、兄弟の手にやだねられた。かれは、チャーチ・ハウス・スクールに首席を占めた。また、かれは、ミルトン（Milton）に関する説文で、金メダルを与えられた。

一七三八年、五歳で、自費生としてオックスフォード
ドのペンブールック・カレッジ（Pembroke College）に入り、二〇歳のときに、「建築学要論」（The Elements of Architecture）という小説を書き、賞賛された。しかし、古典型の建築学を趣味以上ものと考えていて、法律家として生涯を送ることを決心していたのである。一七四一年には、『法律家の詩神への告別』（To Law's unfinished Muse）と題する一冊の詩をものとして、イギリスにおける法曹の教育機関の一つであるミドル・テムプル（Middle Temple）に入っていた。また、一七四三年一月には、オール・ソウルズ・カレッジ（All Souls College）（ジュールズ・カレッジ）に選ばれたが、かは、優先的な被選出権を有している設立者の親族ではなかった。三年後（一七四六年一月）には、通常、法廷弁護士と訳されているバリスタ（Barister）になり、ロンドンとオックスフォードを渡き渡した。新参の弁護士としてのステータス、有力な友人や縁故があるロンドンとオックスフォードの進出を一時的で、あまりはやくなかったが、かれのカレッジと大学のためには多くの有効な仕事をしていった。一七五〇年には、法学博士の学位をとり、また、大学総長裁判所の裁判官である評定者（Commissioner）の裁官を務め、一七五七年にはアイルランドの民訴裁判所の首席裁官に選ばれた。ついで、一七五〇年には、大学出版部の代議員を務め、一七五一年にはアイルランドの民訴裁判所の首席裁官の地位に就任するように申し出られたが、かれを拒否したりした。この年には、王宮顧問弁護士に任じられ、さらに王宮顧問弁護士（Counsel）の地位を失った。しかし、大学との関係は保っていた（ニール・イン・ホール（New Inn Hall）の長に就任）。一七六三年には、ミドル・テムプルの評議員に選ばれ、後述するペンダムが、ブラックストンの講義を直接聞いたのは、この年の一二月からのことであった。
ウィリアム・ブラックストン

一七六五年、かれが四十二歳のときに、「イギリス法
釈義」の第一巻が公刊され、一七四四年完成は一七六九年で
ある。文章家および法律家としてのかれの名声は、高
まるのであった。ところが、一七六六年には、かれは、
教授の地位とニューアイン・ホールの長の地位を放棄し
て、オックスフォードと手を切ったのである。

裁判官としてのブラックストンの経歴は、かれが四七
歳のときの一七二〇年にはじまる。かれは、その年に、
民訴裁判所（Courts of Common Pleas）の裁判官の地位
をひきうけたが、王座裁判所（Court of King's Bench）の裁判官
と希望を表明したこともあって、王座裁判所の裁判官と
任にあっただけで、六月の三日には、はじめての予定と
おり、民訴裁判所の裁判官に復帰した。まもなく、イエ
ツが去世したからである。そして、一七八〇年四月四
日にこの世を去るまで、この裁判所の裁判官として在任
したのである。享年五七歳裁判官としての在任は、一
年であった。裁判官としてのブラックストンは、「有能
なる」（Considerations of the Laws of England）であっ
て、すでに一七五四年に公表されたものである。第二巻は、
すでに一七五四年に公表された「傍系親族論」（Essay on Coher-
ent, Considerations on Copyrights）で、あたって、前出のオリル・ソウル
ズ・カレッジの設立者の血縁者で、ウェルズになる優先
権をもつ者の範囲を拡げることが懸念されたと論じた
ものである。第三巻は、一七五八年に発表した「財本
保有権者論考」（Considerations on the Laws of England）であっ
て、エドワード・アイルとウィリアム征服王の治世に王の直
接領であったマナーの土地保有者が、自由土地保有者と
してナイトの遷移をもつか、または財本保有者として
それをもたらすかの問題について、そのいずれにも
オックスフォード・プレスは、『Observations on the Oxford Press』で、プレスの実情を訴え、その改革を唱えて、副総長へあてた手紙である。最後の第5は、「一七五九年に出された、マグナ・カルタと森林憲章に関する論文で、マグナ・カルタと森林憲章などを整理したものである。

プラックストンについて詰め場合、かれとほぼ同時代の二人の法律家に言及しなければならない。一人は、「一七五六年から一七八八年まで王座裁判所の首席裁判官の地位にあったマジュ・マッセン＝トン（Lord Mansfield）で、もう一人は、わが国でも有名な最大多数の最大幸福（The greatest happiness of the greatest number）という功利主義を唱えたベントン（Jeremy Bentham）である。マジュ・マッセン＝トンとベントンは、ともにイギリス近代法の形成において大きな役割を果たしている。プラックストンとマジュ・マッセン＝トンは、法務書名（Pleasanter Gentmen）の地位を席替えしたので、マジュ・マッセン＝トンは、ニューマッセン＝公爵（Newcastle）に対して、ニューマッセン＝公爵に推薦した。しかしが、プラックストンは、一七五三年より六日、イギリスの講義を教えることを推奨ののであった。その中で、『三〇歳の法学者教育史上はじめて、大学でイギリス法に関する『私に講義をしたのである。これは、大明星であったが、しかしこ
この成功をみたチャールズ・ヴァイナ（Charles B. Wynia）は、イギリス法の講座をオックスフォードに寄付するこ
とを思い立った。かれは、当時の判例の要旨を収録した、「判決要録」（Cases decided at Law and Equity）で多
くの財産をつくっていたが、一七五六年にその遺産の大
部分にあたる一二〇〇〇ポンドをイギリス法の講座の
ために寄付した。そして、この講座は、二年後の一七五
八年の一〇二五日には開講し、ブラックストンがその
最初の担当者に推されたが、これは、今日でもヴァイ
ナ講座（Wynia Lectures）として伝わっている。かれの法
学者としての地位は、これによって確立されたといえよ
う。ときに、三五歳であった。このように、マンスフィ
ールド卿は、さらに、王座裁判所の首席裁判官であっ
たときに、ブラックストンをその首席裁判官としてむか
っている（一七〇〇年。しかし、ブラックストンとマ
ンスフィールド卿の判決が「イギリス法釈義」に
ついて、弁護士を望む青年の読むべき本について
質問を受けたとき、それを推奨して述べたことはであ
る。）(最近まで、わたたくしは、そういう質問に、じぶん
の満足のゆくように決して答えられませんでした。しかし
し、ブラックストンさんが釈義の出版にかかったとき、わた
くは決して迷うことはありませんでした。そこで、ご令息は、
分析的な推理が、快な説明の体系で、わかりやすくされて
いるのを見出すように、そこで、令息は、門につけ
ないようにではありませんが、わたたくしのような優れた法律
の基礎をなし主要原理を吸いこむことができるよう...
つぎに、ブランクストンとペンタムについて考察する。
ペンタム（1581～1618）は、ブランクストンの批評者であったというが、
もともと適切な把握方法であるとはいいえない。前記のように、ペンタムが
批評者であったというのであれば、七世紀の一七六三年
の二月からのことであるが、このときの印象を遡るにつれて
かれの書いたもののが見えてくる。ブランクストンの講義
の初期に属するといえる。かれの著作には、そのような時期の法の状態が反映されていると
功利主義にとどまらず、立法理論の第一歩だった。
一七七六年の『統治断簡』（A Fragment on Government）に
おいて、ブランクストンの『イギリス法釈義』の序論中
の単独論をとりあげている。ブランクストンは、かれの
時代に、いかにも魅力をもつるかにある。かれは、まず、つ
ないでいかに位置づけていられるかをみたとき、かれは、
ペンタムは、かれの最初の著作であるといえる。かれの
社会をいかに把握し、また、ブランクストンをそのなか
において、あらゆる事態を、発見と改良とにみてい
ウィリアム・ブラックストン

地上のもっとも遠かれた地域が、横断され、探検され、空気中の元素はごくいきいき、分析されて、われわれに知らされたこと、は、たとえ、ほかのすべてがなかったと、その正義の尺度をなすものは、最大の幸福である。それゆえ、司法官の立法の役割があるのか、と、基本的な定義の帰結が、これまで、始めて不十分な方法と正確さをもって展開されたぎりないことを指摘するなかで、この功利主義の基本原則を「発見」したものを、自分の功績を誇っているとみられるが、それについて、法の改革の重要性とその敵について、つぎのようなくだりのなかで言及している。少しづつずつ、しかし、ペントンの論旨のはかびをすることの余地があるとされるならば、また、自然法において、発見をなす余地ならば、いかに、われわれがそれに通達するようになることになるのである。もし、遠隔の国々の通達するようになるのかならば、たしかに、われわれにまえずおとらず、あるのであり、また、精神界において、どのように考えても、改革をなす余地も、まえずおとらず、あるのであり、また、精神界において、どのように考えても、改革をなす余地も、まえずおとらず、あるのである。
このように述べたペンタムは、『敵』をブラックストンのなかにみていた。すなわち、そのような敵を、有名な『英法訳義』の著者のうちに見ること、または、すっくとくとも、わたしが見たと想像することは、わたしがの不幸とするとところであった（が、それは、たんに、わたしただけの不幸にとどまらない。かれこそその主題について、いままでにあわれた、どんなほどの著者よりも、尊敬、喝采、したがってまだ、影響力……のより大きい分前は、筆者きたあらわれた、どんなほどの、ペンタムは、『英法訳義』（Comte's on the Open）なのか、ブラックストン批判を行なうが、それについてこそ、ここでは割愛しなければならない。

四、『英法訳義』の体系

ブラックストンが、『英法訳義』の影響と評価をみるなかで、明らかにすること南非たち、『英法訳義』の体系を明らかにし、つぎに、その評価と影響を示すことが必要であろう。

本書は、前編（Introduction）と四つの編（Book）か
ラ構成されている。

第一に、「序論」は、「イギリス法の研究、性質および
範囲について」(Of the Study, Nature, and Extent of
the Laws of England) と題し、第四節(Section)から成っている。
それには、第一節「法の研究について」(Of the
Nature of Laws in General) 第二節「イギリス法
および第四節「イギリス法に服する諸国について」(Of
the Countries subject to the Laws of England) であ
って、本文は、一〇〇頁ある。そのうち、ペンタムが
『統治断簡』と『釈義解説』において批判の対象とした
のは、第二節と第三節とであり、第二節は、大学における
新しい試み、すなわち、イギリス法を素材としての法
学教育が、理由があるものだろうということについて述べて
いる。

第二に、第二編「人の権利について」(Of the Rights
of Persons) は、三十六頁あって、第一章「個人の絶対
権について」(Of the absolute Rights of Individuals)
から第八章「法人について」(Of Corporations) に
及んでいる。ここでは主として人法 (Law of persons) に
ついて論じられている。また、わが国で基本的
に不動産権の種類を、つぎの二章はその取得原因を扱っている。こ
の二章については第三章「財産について」(Of Property
in Things) から「遺産および遺産管理による権原について」
(Of Title by Testament, and Administration) に
及んでいる。さらに、第三章では、不動産法に関係しているのに
に対し、契約法についてはわが国
のなかで扱われていることが多いのである。

第三に、第三編「不正不法行為について」(Of Private
Wrongs) は、本文が四五五頁あって、不正な当事者の
行為による私的不法行為の教唆について」 (Of the Right
をもつ者の行為による私的不法行為の教唆について) という第
二章には、次のように述べられている。

「イギリス法における、違法行為の、違法行為の
権利者の義務。」

このように、「イギリス法における、違法行為の
権利者の義務。」このように、「イギリス法における、違法行為の
eknow', "content": "行為による私的不法行為の教唆について」 (Of the
行為による私的不法行為の教唆について) という第
二章には、次のように述べられている。

「イギリス法における、違法行為の、違法行為の
権利者の義務。」

このように、「イギリス法における、違法行為の
権利者の義務。」
ウィリアム・ブラックストン

『イギリス法典義』は、イギリスにおけるアメリカの法と法学に対して、甚大な影響を与えた。そのことは、個々具体的な問題を論ずる上、かれの著作に関するいくつかの評価をみる上で満足しなければならない。しかし、このことから、かれの目的を達することができることである。『イギリス法典義』は、かれの生前に八版を重ね、一八四一年には、ジェイコブ・スティーヴンズ（Henry John Steevens）がその現代版として新しい版を出し、フィリップ・スティーブンス（Stephens's Commentaries on the Laws of England）は、今日、一〇〇版を教えている。
本がイギリスのほかでみ出されるであろう。われわれの関心圏では、われわれは、一つもあることを知らないと、フランスの法学者界において断定している。さらに、ブラックネット（Theatre M.P. Blackstone）も、肯定的に引用している。

また、イギリス法伝承法の現代における影響について、内田教授は、体系化されたものとしてのイギリス法の解釈は、今日でも、まだ、ブラックストーンの方法を改良したもの以上にしているわけではないのである。

つまり、アメリカについてみると、独立前後の法律文書が少なく、アメリカの法律家は、イギリスの影響を受けてもよいであろう。そのため、アメリカのイギリス法の影響を受けてもよいのである。また、イギリスにおけるスティーヴンと同様、『イギリス法伝承法』の現代版として、ケント（Kan Law）の『イギリス伝承法』（Commentaries on Amer. Law（1826–34））がある。
ウィリアム・ブラックストン

これまでの考察で、不十分ながら、ブラックストンと呼ばれる『イギリス法教義』の重要性は、ある程度まで明かになったであろう。前述のように、このようなブラックストンについて、これが国ではほとんど知られてなく、その後の国においても、ブラックストンに関する研究がなされ、『イギリス法教義』が一九世紀における制定法による変容を受け、以前のイギリス近代法を反映した一つの典型として再認識されることを希望したい。


内田力穂（1994年）『イギリス法教義』の立派な変革論に対する回顧と再評価。同内田教授の研究に大きく影響を与えた文書を紹介する。